

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近藤妙子著 『北京の三十年』
Sub Title	Taeko Kondo, "Thirty years in Beijing"
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1985
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.7 (1985. 7) ,p.99- 103
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850728-0099

紹介と批評

近藤妙子 著

『北京の三十年』

一

中国は、建国以来厚いヴェールに包まれた「不可解」な国とみられてきた。「不可解」な中国を分析する手立てとして、中国研究者は、これまで丹念に『人民日報』等の公式メディアを追ってきた。これは、現在でも基本的に変わりはない。しかしこのような公式文献だけでは、中国社会の実質にいま一歩迫りきれない限界があった。このような反省から、それ以外の様々な資料が注目されてきた。日本人を含めた外国人ジャーナリストの記事、ルポルタージュ、訪中団の見聞記、「工作通訊」、「連江文書」等の外国に漏れた僅かな秘密文獻、中国から香港に逃れた難民に対するインタビュー、等がそれである。

現在情況は変わりつつある。文化大革命以後の対外開放政策の加速的前進により、中国の実相に迫る新たな情報源がいくつ

も誕生しつつある。例えば、外国人の長期滞在が留学・ビジネス等の理由により可能となり、制約はまだ大きいが、中国社会を内部から見られるようになった。数多くの中国人も外国に留学できるようになった。手間はかかるが、外国人研究者が中国の上層幹部に直接インタビューできるようになった。「内部発行」の資料が続々外国に流れ込んでいる……等々。このようにして、「不可解」な中国のイメージは徐々に取り除かれつつある。いうまでもなく、未知の部分は依然として大きいが……。

こうした一連の情況変化と歩調を合わせるようにして、中国における実際の生活体験をもとにした著述が近年登場しはじめている。代表的なものを挙げれば、山本市朗『北京三十五年』（上・下巻、岩波新書、一九八〇年）、西条正『中国人として育った私』（中公新書、一九七八年）、二つの祖国をもつ私』（中公新書、一九八〇年）、梁恒・シャピロ『中国の冬』（サイマル出版、一九八四年）、等がある。いずれも、何十年と中国に暮らした人々の生の声を通じた中国現代史である。われわれのような中国研究者が、いくら眼を凝らして分析したところでかなわない一定の迫力がこうした著作のなかにある。

ここに取り上げる近藤妙子『北京の三十年』も、いわゆる研究書ではなく、個人の体験をもとに綴ったいわばドキュメント中国現代史である。内容がフィクションでないだけに、読者の心をとらえて一気に読ませてしまう。また、これまで中国の社会描写はほとんど男性の眼を通じたものばかりであった

だけに、女性が語る中国現代史は貴重である。事実本書は、著者が女性だからであろうか、日常生活のごくありふれたことから、たとえば家計のやりくり、食生活、衣服等に対する洞察が鋭く、繊細である。

二

物語は、著者近藤妙子の京都大学に学ぶ中国人学生王和成との出会いからはじまる。戦前の露骨なまでの中国人蔑視、また親の反対を乗り越えて、近藤妙子と王和成は恋愛を結婚へと結実させた。時まさに日中戦争の最中であった。王和成は昭和二〇年初めに京都大学に学位論文を提出し、医学博士となり、日本残留か中国への帰国かの選択に迫られた。幸い、北京開発病院に職がみつかり、中国への帰国が決定した。そして二人は、昭和二〇年六月敗色濃い日本を後に中国へ旅立った。

一九四五年八月の第二次世界大戦の終結から一九四九年一〇月の中華人民共和国の成立までは、共産党と国民党のあいだのいわゆる内戦期である。著者は、戦後しばらく日本の敗戦ゆえに夫王和成の忠告に従って家のなかでほとんど暮らした。この時期王和成は、開発病院の閉鎖にともない警察病院の医務主任、そして間もなく院長に昇進した。

一九四六年一二月、王和成は彼のその後の人生に大きな意味をもつ事件に巻き込まれた。北京大学の女子学生沈崇がアメリカ兵によって暴行され、その後全国的な反米デモを引き起こさ

せたいわゆる沈崇事件がそれである。この事件の直後、彼はアメリカ軍に頼まれ沈崇を診察した。そのため彼は事件の裁判に証人として呼ばれ、彼女が実際に暴行されていたかどうかを問われた。しかし結局彼は「わからない」と答え、全国的に非難の的となってしまったのである。これによって彼は、警察病院から北京市第二病院の外科主任へ異動させられた。

一九四九年一〇月、中国共産党指導の中華人民共和国が成立した。著者は、遊郭の女性が解放されたことなどから新政権を評価しはじめた。この建国の時期から一九五〇年代、そして一九六〇年代中葉にはじまる文化大革命前までの時期、王和成一家は全般的にいつて平和な日々が続いた。いうまでもなく、その間家庭の内外で、次に述べるような政治・経済の変動による余波もいくつかあった。

建国後、王和成の勤める病院にイデオロギー教育のための政治部がつくられ、そこへ人民解放軍の一青年兵士が最高幹部として配属された。彼は、罫りからチャホヤされるのをよいことに徐々に鼻が高くなり、それが高じて権力を濫用し、日常生活も物質面で派手になった。一九五一年にはじまる三反運動(官僚主義、浪費、収賄・汚職に反対する運動)により、この青年兵士と病院内のその取り巻き連中が槍玉にあげられ、病院を追放させられた。

一九五七年、仕事上や活動上における態度をチェックするための整風運動がはじまった。王和成は医者でかなりの高給取り、

それに医学だけで政治に関心を向けなかったために、病院内の壁新聞で批判された。しかしそれも事なきを得、運動も終息した。著者によれば、この頃から人びとは、「見ざる、聞かざる、言わざる」が最大の自己保全策を思ふようになった。

一九五八年にはじまる大躍進運動以後経済は混乱し、深刻な食糧不足を招来した。人々は、協議により配給量のなかから一定量を自主的に被災地へまわした。著者はもともと日本人であるという理由から、王和成は高級知識分子であるという理由から、それぞれ特別配給が与えられ、幸いそれほど苦しまずに済んだ。

新中国成立以後文革開始までの時期、著者自身にもいくつかわく大きな変化が起った。一つは、著者が一九五六年から病院の図書室で働きはじめたことであり、もう一つは、一九五七―八年と一九六二―三年に二度日本に里帰りしたことである。最初の里帰りは単身二年ぶりの帰国であり、二度目は一人娘を連れての自費での帰国であった。いずれもまだ日中間に国交のなかつた時期であり、手続は中国紅十字会と日本赤十字会を通じて行われた。

三

このようにして、平和な日々はまたたくまに過ぎ、一九六五―六年から激動の文化大革命がはじまった。当初人びとは「文化」関係の運動と考えるが、同時に「革命」の二字に若干の不

気味さを感じた。文革の発動とともに、昔からの街路名、屋号等が革命的な名称に変えられた。これで一番困ったのが郵便配達人だというのは面白い。

文革中、各地で紅衛兵が組織された。「造反有理」のスローガンのもとに、地主・資本家階級出身の人びと、あるいは幹部が、日常の言動にほとんど関係なく群衆の前に引きずり出され、激しく糾弾された。殴打され、半死半生となった人びとは王和成と著者の働く病院にも続々と運ばれたが、病院内の紅衛兵は治療を許さなかった。運び込まれた傷病人は結局次々と死んでいった。

劉少奇夫人の王光美が、娘が交通事故に遇ったという嘘の報告で病院におびき出され、そのまま清華大学での糾弾集会に連行された話は有名であるが、その舞台となったのが、二人の勤める北京第二病院であったという。このとき著者は、王光美のあとにあわてて飛んできた劉少奇を目の前で見かけたという。「私は主席に事故はウンだとはいえなかったし、夫人が清華大学の紅衛兵にさらわれたとは告げられなかった。…それから劉主席は悲惨な目にあつたことだった。あの背の高い豪傑のような姿が目にはやきついてはなれない」。

一九六七年一月、文革はついに王和成一家に飛び火した。一貫して医学に情熱を注ぎ、政治に深入りしなかった王和成が、胃潰瘍による二カ月の入院から退院した翌日病院の一室に勾留され、家財も押収されたのである。「罪状」は、前述の「沈崇

事件」における彼の対応と、自宅に日本人の出入りが多かったことによるスパイ容疑であった。勾留当初、第三者を通じたりで夫婦はわずかに交信できたが、それもやがては発覚してしまった。結局これが二人の永遠の別れとなった。王和成は、その後公安局へ連行された。

一九六八年にはいると、今度は著者自身が勾留された。容疑は「国際スパイ」であった。著者は、釈放されたい一心で当局の要求通りに誇張して自己批判を書くが、それが糾弾集会で逆に墓穴となった。自殺も考えた。しかし娘の顔が浮かび断念した。著者の唯一の楽しみは、毎夜訪れるネズミ一家に会うことだった。そのためパンのかけらを残すのが日課となった。

勾留後一年、著者はようやく釈放された。家へ戻ると、仕打ちに耐えながら、良心的な人々の支えによって細々と生計をたてていた一人娘が、大喜びで出迎えてくれた。釈放後著者は、「労働改造」として病院の実験室の汚れた器具を洗う仕事を割り当てられた。

一九六九年二月、ついに王和成の死亡通知が届いた。山西省臨汾の第三監獄で、持病の胃潰瘍が悪化したのが引き金であった。遺体はそのまま共同墓地に葬られた。冤罪を着せられたままの死であった。

一九七二年九月、日本と中国のあいだの外交関係が正式に結ばれた。夫を失った著者は、日本への帰国を決意し一九七三年初め申請書を提出した。途中病院当局が横やりを入れるなどの

妨害はあったが、どうかそれも乗り切り、一九七三年二月娘と二人北京を発ち、年明け早々故国の土を踏んだ。著者は、その後中国物産店で働き、娘は針灸を習い開業へときぎつけ、日本での生計はどうか安定した。それに先立ち、永住の手続を整えるため、中国人に移してあった国籍も再び日本人に変更した。

一九七九年、突然中国から王和成の名誉回復の手續が進行中であるとの知らせが届いた。一九七六年の毛沢東の死以後の文革の逆転評価にもなる措置の一環であった。飛行機代、宿泊費とも中国側負担で、著者は一九八〇年、娘と共に夫の名誉回復のために再び北京を訪れた。かつて北京を出るときとは違って変わり、どこへ行っても彼らは大歓迎となった。なじみの人たちが、名誉回復を祝う会を開いてくれた。また王和成の追悼会も開催された。しかし、こうした会に出席している病院の職員の内中には、かつて王和成一家を激しく指弾した人びとも含まれていたという。著者にとっては、何とも複雑な気持ちの「名誉回復」であった。

四

以上本書の輪郭を述べてきたが、いうまでもなくここで中心は文化大革命である。無実の王和成が死にいたる過程はあまりにも無残である。しかし驚くべき事実は、こうした例が特殊ではなかったということである。これは、一説には二〇〇〇万

人の犠牲者を出したといわれる文革の一つの縮図にすぎない。傷を負った者の数はその何倍かになるであろう。文革中一人が攻撃されると、その親類、縁者、知人、友人に災禍が及ぶ。したがって、実際の受難者の数ははかりしれないのである。本書の最後の部分にも書かれているように、現在の中国社会における潜在的問題の一つは、文革期の受難者と加害者が、いまだ過去のしこりを残しながらも、同じ職場で仕事をしなければならぬ現実である。評者自身、こうした怨念を中国人の口から実際に聞いたことがある。現在は経済の近代化へ向けて団結しているが、この問題は心の傷跡だけにいつか何らかのかたちで噴出することも考えられる。

ところで著者は、自らが背負った苦労の原因を単に文革にのみ置いていない。著者は、その苦労が過去の日本と中国のあいだの不幸な歴史につながっているのではないかと述べている。「私たちのように日本と関係を持った者は、いつも抗日戦争のどばっちりを受けて小さい顔をしていなければなりませんでした。小、中学校で教える国語のなかにも、図書館にある小説のなかにも至るところに、『帝国主義』『日本鬼』の文字が見え、それを横目で見ると、私は戦争を呪ったものでした」。この指摘は、今後の日中関係を考える上で重要であろう。

本書に描かれたストーリーは、平和な一家庭が文革という一大政治ドラマによって崩壊する痛恨の悲劇である。しかし本書は、読後、読者を悲しみのどん底にたたき落としてしまう。「お

涙頂戴」式のものではない。むしろ読者は、こうした悲劇を乗り越えてたくましく生きてゆこうとする一女性の力強さに感銘を受けるであろう。

(新潮社刊、一九八四年二月、二二四頁、一〇〇〇円)

国分 良成